

新設A看護大学の成人看護学実習における臨地実習指導者の思い  
— 4 課程の実習指導経験から大学教育の実習を受けるにあたって —

永 見 純 子・出 石 幸 子・村 口 孝 子  
平 野 裕 美・小 野 晴 子

Junko NAGAMI, Sachiko IZUSHI, Takako MURAGUCHI,

Hiromi HIRANO, Haruko ONO :

Thoughts of the Bedside Training Instructor in charge of the Adult Nursing Clinical Practicum in a New A College of Nursing

— Consideration of Accepting Practicum in a College Curriculum Based on the Training Instruction Experiences of Four Nursing Courses —

鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要 第72号 抜刷

2015年12月

## 新設 A 看護大学の成人看護学実習における臨地実習指導者の思い — 4 課程の実習指導経験から大学教育の実習を受けるにあたって —

永 見 純 子<sup>1</sup>・出 石 幸 子<sup>1</sup>・村 口 孝 子<sup>1</sup>  
平 野 裕 美<sup>1</sup>・小 野 晴 子<sup>1</sup>

Junko NAGAMI, Sachiko IZUSHI, Takako MURAGUCHI,

Hiromi HIRANO, Haruko ONO :

Thoughts of the Bedside Training Instructor in charge of the Adult Nursing Clinical Practicum in a New  
A College of Nursing  
— Consideration of Accepting Practicum in a College Curriculum Based on the Training Instruction  
Experiences of Four Nursing Courses —

本研究の目的は、新設 A 看護大学（以下 A 看護大学と略す）の成人看護学実習受け入れ前の臨地実習指導者の思いを明らかにし、効果的な実習を行うための課題と方法を検討することである。臨地実習指導者に半構成的面接を行い、質的に分析した。その結果《臨地実習指導者の指導観》《教育課程の違いによる実習指導の複雑さ》《教員との連携への要望》《成人看護学実習の受け持ち決定の苦慮》などの7のカテゴリーが抽出された。臨地実習指導者は、教育課程の違いによる実習指導の複雑さを感じ、明確な指導要綱が示されることに指導のやりやすさを実感していた。また成人看護学の多様な学びが得られにくくなってきた現状に苦慮していることが分かった。成人期の特徴を有する患者に看護展開ができるよう調整していく必要があると考える。教員との連携への要望が抽出され、臨地実習指導者と教育との連携を深め協働することが双方の課題であると示唆された。

キーワード：新設看護大学 成人看護学実習 臨地実習指導者 思い

### はじめに

看護学の臨地実習においては、大学教員による教育と共に、実際に患者のケアに当たっている臨地実習指導者による臨床看護が重要な意味を持っている。看護教育の大学化に伴い、教育と実践が乖離してきた<sup>1)</sup>といわれる今日、大学と実習施設の連携・協働が重要である。

A 看護大学は、平成 27 年 4 月に開学した附属の病院を持たない大学で、成人看護学領域の実習は 3

年次に県内の 13 施設で急性期・慢性期看護を計 5 単位行う予定である。実習病院では、専門学校や専修学校の実習を受け入れているが、ほとんどの施設が、大学生の実習を受けることは初めてである。受け入れに際し、各施設では、看護師に臨地実習指導者養成講習会の計画的受講や院内の実習委員会を立ち上げるなど、準備を行っているところもある。しかし、大学と専門学校との違いや、実習内容について、違いが分からないという意見があり、各施設の臨地実習指導者が困惑している状況がある。

先行研究より臨地実習指導者は、実習指導に対して何らかの不安や戸惑いなどを持っていることが、明らかにされている。高橋<sup>2)</sup>は、実習指導で悩んだ

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

こととして、指導者としての知識や自信のなさ、スタッフや学校との連絡、調整、学生の特性に関わるものがあつたと報告している。また、尾崎<sup>3)</sup>は、臨地実習指導者の不安は、「学生に関すること」「学校に関すること」「環境に関すること」「指導に関すること」「人間関係に関すること」であると述べ、指導者への支援の実践に向けて、大きな役割を持つ教員、管理者が意識的に関わっていくことが必要であると述べている。

以上のことから、A看護大学の成人看護学実習は2年後に行われるが、受け入れ前の臨地実習指導者の思いを明らかにし、効果的な実習を行うための課題と方法を検討することが必要であると考え、本研究に取り組んだ。

## 1. 研究の目的

本研究の目的は、A看護大学の成人看護学実習受け入れ前の臨地実習指導者の思いを明らかにし、効果的な実習を行うための課題と方法を検討することである。

## 2. 用語の定義

本研究で用いる「思い」とは、実習指導者が臨地実習に対して、不安や戸惑い、感じていること、気にかかること、考え、実習指導を受けることに対する抱負と定義した。

## 3. 研究方法

### (1) 研究デザイン：事例研究

(2) 研究対象者：A看護大学の成人看護学実習を受ける施設で、研究協力に同意を得られた臨地実習指導者1名。

(3) データ収集期間：平成27年 9月4日

### (4) データ収集方法

A看護大学の実習施設である病院を、看護師養成の教育課程にばらつきを持たせて県内の東部、中部、西部から各2施設を選んだ。施設の管理者に文書で研究協力を依頼した。研究対象者である臨地実習指導者は施設長に強制力が働かないよう指導者間で希望を募る方法を依頼した。同意の得られた臨地実習指導者にインタビューを依頼した。今回は、そのうちの4課程の学生指導経験者1名について分析を行った。

データ収集には、半構成的面接法を用いた。対象者の都合の良い日時を調整し、対象者の施設内の落ち着いた場所の個室でインタビューを行った。面接は、あらかじめ吟味した面接ガイドを使用した。面接ガイドは、①A看護大学の学生の実習指導をする上でどのような思いでいるのか。②複数の教育課程の実習指導をする上での思い。③病院と大学が臨地実習を効果的に行うために、どのように協力し合うとよいか。④A看護大学に希望することは何か。という内容で行った。

対象者には自由に感じたことや思いを語ってもらうようにした。面接内容は、許可を得てICレコーダーに録音し逐語録を作成した。

### (5) 分析方法

分析は質的帰納的アプローチをとり、内容分析を行った。逐語録から言葉の意味内容を抽出しコード化を行った。次にコードの意味内容の類似性に従い、サブカテゴリー、カテゴリーの形成を繰り返した。

本研究はデータの信頼性・妥当性を確保するため、共同研究者間で協議しながら進めた。

### (6) 倫理的配慮

研究対象者へは、文書および口頭で、研究の目的、意義、方法、参加は自由意志であること、途中で参加を辞退できること、断っても不利益を受けないことを説明し文書にて同意を得た。得られたデータについては、研究目的以外に使用しないこと、本研

究の成果を公表すること、データの保存期間は5年間とし、研究対象者の希望により、個人情報保護や本研究の実施に支障がない範囲で閲覧することができることを説明した。また、データを全てコード化し、匿名性についての配慮を行った。

本研究は、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査の承認を受けて実施した。

## 4. 結果

### (1) 研究対象者の背景

対象者は、50歳代の女性で看護師経験は25年、実習指導者経験は15年であった。指導した学生の看護教育過程は准看護師養成課程、看護師養成課程（2年課程、3年課程、通信制2年課程）の4課程であった。インタビューは、45分間行った。

### (2) 創出されたカテゴリー

臨地実習指導者の思いとして、インタビューの逐語録を、言葉の意味内容に従ってコード化し、216のコードが得られた。それらより、37のサブカテゴリー、7のカテゴリーが創出された。以下、《 》はカテゴリー、〈 〉はサブカテゴリー、「 」はコードとした。

### (3) 成人看護学実習における臨地実習指導者の思い (表1)

《臨地実習指導者の指導観》は、〈指導者がその場にいないことによる学生の困惑に対する心配〉〈学生の居場所への心配〉〈自らの思いと教育側との違いに戸惑う〉〈学生を受け入れることの喜び〉〈実習指導者としての責任〉などの11のサブカテゴリーから構成されていた。〈指導者がその場にいないことによる学生の困惑に対する心配〉は、「学生さんが報告したいのに指導者がどこにいるか分からなくて困る」などのコードより導かれた。また「カンファレンスルームを確保しないとイケない」「どうしても居場所がないかも知れない」などと語ることより

〈学生の居場所への心配〉が導かれている。実習中の受け持ちについては、教員から「受け持ちだけでお願いします。と言われて（学校ごとに）違う」と言い、「こんなことを見学したらいいのと思う」と異なる学校の方針への戸惑いを語っていた。実習指導については、「（学生が）演習でしたことと違うものもある」「やっぱり私たちは基本に返らないといけないかなと思う」と言い、〈基本に返る必要性を感じる〉と思っていた。また「いろんな課程の実習生を受け入れるのを楽しみにしている」と語っていた。

《教育課程の違いによる実習指導の複雑さ》は、〈各教育課程による実習目的・目標・評価の相違〉〈2年課程の実習方法の把握〉〈3年課程の実習方法の把握〉〈通信制の実習方法の把握〉〈看護大学の情報を得る〉などの5のサブカテゴリーにより構成されていた。〈各教育課程による実習目的・目標・評価の相違〉は、「学校、学年によって教育課程・方針が違うのでどんな実習をしてもらうかはその時々で組み立てる」などのコードから導かれた。学校ごとに示される要綱について、より明確な指導内容が書かれているものが「目的や目標、評価基準をきちんと出してもらってやりやすい」と語っていた。

《多様な背景を持つ学生に対する学生観》は、〈指示がないと動けない若い学生を指導するうえでの戸惑い〉〈高齢者と接することが少ない若い学生を指導するうえでの戸惑い〉〈若い学生が何を考えているかわからない〉〈社会人経験者は人と関わるのが上手〉など8のサブカテゴリーから構成されていた。高校を卒業後、すぐ入学している若い学生に対して「今時の若者という感じ」「学生の気持ちがわからないことが多々ある」「高齢者と接することが家庭でも少ない」「実習に出たらつまりずく子がいる」と考え、「学生の気持ちを引き出してあげたらいいが困難」なことがあると思っていた。一方、社会人経験者の学生に対しては、「社会人経験があるので患者さんとの対話はできる」と考えていた。

《教員との連携への要望》は、〈教員は臨床の場で

表1 成人看護学実習における臨地実習指導者の思い

総コード数 (216)

カテゴリー [7]	サブカテゴリー [37]
臨地実習指導者の指導観	指導者がその場にはいないことによる学生の困惑に対する心配 (12)
	学生の居場所への心配 (11)
	自らの思いと教育側との違いに戸惑う (7)
	准看護師資格のある学生への指導 (6)
	実習がうまくいかないことへの危惧 (3)
	自分たちのやり方をしたい (3)
	准看護師資格のある学生への気持ち (2)
	基本に戻る必要性を感じる (2)
	実習指導者としての責任 (2)
	誰にでも声かけできる職場風土 (2)
	学生を受け入れることへの喜び (1)
教育課程の違いによる実習指導の複雑さ	2年課程の実習方法の把握 (18)
	各教育課程による実習目的・目標・評価の相違 (10)
	看護大学の情報を得る (7)
	3年課程の実習方法の把握 (7)
	通信制の実習方法の把握 (6)
多様な背景を持つ学生に対する学生観	指示がないと動けない若い学生を指導するうえでの戸惑い (7)
	社会人経験者は、人と関わるのが上手 (6)
	働きながらの准看護師学生は記録・自己学習の時間が取りづらい (5)
	チームとして一緒に働きやすい (5)
	若い学生が何を考えているかわからない (4)
	高齢者と接することが少ない若い学生を指導するうえでの戸惑い (3)
	働きながらの准看護師学生は技術の経験はできる (3)
教員との連携への要望	通信制の学生は目的意識がある (2)
	教員からの学生の情報提供を求める (9)
	教員は臨床の場で学生をみてほしい (9)
	カンファレンスや会議を持ちたい思い (5)
	コンタクトをとりながらいっしょにやりたい (3)
	教員の体制の把握 (3)
成人看護学実習の受け持ち決定の苦慮	教員とのズレを感じる (1)
	成人実習の対象者が高齢者になりがちな心配 (8)
	在院日数の短いことによる心配 (7)
実習病院の指導体制の問題	認知症の患者さんのケアが予定通り進まないことの心配 (6)
	学生の専任指導は難しい体制 (13)
看護大学に対する指導者の認識	勤務体制の問題 (6)
	看護大学教育が目指す人材への思い (6)
	看護大学の実習指導を受け入れることに対する抱負 (6)

( ) は、コード数

学生をみてほしい〉〈カンファレンスや会議を持ちたい〉〈コンタクトをとりながら一緒にやりたい〉〈教員とのズレを感じる〉などの、6のサブカテゴリーにより構成されていた。臨地実習指導者は、「レディ

ネスを言っておいてもらいたい」と考え、学生の情報について「私たちは現場で見ているのでズレが生じる」「言っておいてもらったと思うことが多々ある」と〈教員からの学生の情報提供を求める〉気

持ちを持っていた。また現場指導に長時間出てきている教員に対しては、「ズレている感じはあまりない」「コンタクトもとりやすい」「教員は居てもらった方がよい」と思っており、それらのコードより〈教員は臨地で学生をみてほしい〉が導き出された。さらに臨地実習指導者は、〈コンタクトをとりながら一緒にやりたい〉〈カンファレンスや会議を持ちたい〉と思っていた。

《成人看護学実習の受け持ち決定の苦慮》は、〈成人実習の対象者が高齢になりがちな心配〉〈在院日数の短いことによる心配〉〈認知症の患者さんのケアが予定通り進まないことの心配〉の3つのサブカテゴリーにより構成されていた。臨地実習指導者は、成人看護学実習において、「本当に老年になってしまう」と〈成人実習の対象者が高齢になりがちな心配〉について語った。また DPC(包括医療費支払い制度)との兼ね合いで移動が早い「実習後半、他の病棟に変わることはあると思う」などの〈在院日数の短いことによる心配〉や「認知症の患者さんが増えているので思うようにはいきません」と〈認知症の患者さんのケアが予定通り進まないことの心配〉があった。それらより「患者さんの特徴が成人の方はいらっしゃらなくて」と言うように《成人看護学実習の受け持ち決定の苦慮》が導き出された。

《看護大学に対する指導者の認識》は、〈看護大学教育が目指す人材への思い〉〈看護大学の実習指導を受け入れることに対する抱負〉の2つのサブカテゴリーにより構成されていた。〈看護大学教育で目指す人材への思い〉は、「大学が目指しているのは、看護師は選択肢の一つということ」「必ずしも病院だけではなくて、地域での活躍」「だから(専門学校と)違う」などのコードより成り立っている。実習指導に対しては「具体的に方針を示していただいたら」と語っていた。

《実習病院の指導体制の問題》は、〈学生の専任指導は難しい体制〉〈勤務体制の問題〉の2つのサブカテゴリーにより構成されていた。「体制が一番問題だと思う」、「専任ということは難しい」などによ

り〈学生の専任指導は難しい体制〉が導かれた。また「あまり日勤というのが無理」などより〈勤務体制の問題〉が導かれた。

## 5. 考察

分析の結果より、臨地実習指導者は、A 看護大学の成人看護学実習の受け入れに向けて、多岐にわたる思いを抱いていることがわかった。

### (1) 異なる教育課程の学生を受けている指導観

臨地実習指導者は、《教育課程の違いによる実習指導の複雑さ》を感じながら、異なる学年、学校のエ育課程に対する実習指導を、現場に合わせて適宜組み立てていた。その中で、学校ごとに示される実習要綱に明確な指導内容が書かれていることが、指導のやりやすさに繋がっていると実感していた。尾崎<sup>4)</sup>は「学校ごとの違いを理解できない状態で指導にあたることが指導者の不安につながっている」と述べている。今後、A 看護大学の実習開始に向けて、複雑な指導体制である現場に対して、指導要綱に基づきながら、成人看護学実習における実習目標、実施内容、評価を臨地実習指導者と協議しながら進めていく必要があると考える。また、臨地実習指導者が、学生への良好な関わり方や、自らの看護実践場面などを振り返ることにより、実習指導より得られる学びの意味を実感してもらうことも重要であると考えられる。

《臨地実習指導者の指導観》の中には、〈指導者がその場にいないことによる学生の困惑に対する心配〉と〈学生の居場所への心配〉があり、これらの点において配慮の必要性を感じている。

実習指導については、現場での〈自分たちのやり方をしたい〉という思いの反面〈基本に戻る必要性を感じる〉ことや、「学生だけではさせないように」と言うことなどより、〈実習指導者としての責任〉が示され、指導者は学生に対する細やかな配慮や気づかいを持っていると考える。

《多様な背景を持つ学生に対する学生観》として、学生個々の背景によって関わり方が違う難しさを感じながら実習指導を行っていることが分かった。中でも、若い学生の気持ちがわからないことに戸惑いを感じていた。原田は<sup>5)</sup>「看護師養成2年課程や准看護師養成2年課程の学生は社会人経験者が多く基本的生活習慣や自己管理能力が養われている。しかし大学生の多くは、世代や文化の異なる人との交流が乏しいことから生活体験の乏しさ・精神面の弱さがあり、打たれ弱い気質がある」と述べている。今回の結果でも同様に異なる学生気質があることが示されている。臨地実習指導者は青年期の学生の発達課題を個々人の背景と合わせて理解しながら、看護学実習における学習課題が達成していけるよう関わる必要がある。現代の若者に対し将来性のある後輩として、育てていくことの指導観が持てるよう、大学教員としてサポートしていく必要があると考える。

## (2) 成人看護学実習に対する思いと成人看護学実習における今後の課題

臨地実習指導者は、成人看護学実習について、刻々と変化する医療政策・社会構造の背景と相まって、在院日数の短縮化や入院患者の高齢者の割合が増加し、受け持ち患者が「成人」の患者ではなく、高齢者や認知症を伴う患者を受け持たざるを得ない状況からの心配を持っていた。厚生労働省の「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」<sup>6)</sup>は、在院日数の短縮化により、臨地実習を効果的に行うことが困難となっていることを報告している。今回のインタビューにおいても同様なことが述べられている。医療現場は2025年問題を見据えた政策がとられ、今後病院施設の役割が大きく変化していくことが予測される。近年の課題として、在院日数の短縮により継続した関わりができないことや、患者の権利擁護など<sup>7)</sup>受け持ちを同意していただくことの困難さ、成人看護学実習の対象者が高齢者や認知症の患者に偏ったケースを受け持つことが多くなっていること

などが出てきている。成人看護学の多様な学びが得られにくくなってきた現状を指導者も苦慮していることが伺えた。実習で受け持ち患者を決定する際には、対象の年齢が成人期に適応しなくても、成人期の特徴を有する患者に看護展開ができるよう調整していく必要があると考える。

## (3) 新設の大学に関する思いと連携

臨地実習指導者は、大学に対しては「大学なので、専門学校3年課程とは全然違うのではないかと思います」と専門学校との違いを感じ、「大学は看護師（病院で勤務する看護師）も選択肢のひとつだということ」と、より幅の広い実践の場が得られるところと考えていた。2年後のA看護大学の実習については、「実習目的と目標を出してもらったらそれに応じて対応できると思う」「指導者によって、指導の仕方が違うのは困るので統一して関わって行きたい」「目指すところをひとつにして一緒にやっていきたい」と抱負を述べている。また「チームとして一緒に働きたい」と述べていることより、共に学生を育て、将来は仲間として捉えている指導者の思いが伺えた。

また、教育との連携を図る意味において、コンタクトをとりながら一緒にやりたいという思いがあり、カンファレンスや会議を通して、教員と指導者が話し合える場を持つことを望んでいた。そして「教員は臨床の場で学生をみて欲しい」との思いもあった。以上のことより、目標や情報の共有、現場での指導への要望が明らかになった。これらについて、連携を強めて一緒に関わっていくことで、臨地実習と教育の場の協働が実現していくことが可能であると考えられる。

大学教員と臨床指導者の連携・協働のあり方として、中村<sup>8)</sup>は「学生が実習から多くの学びを得ていくためには、大学教員と臨床実習者が学生の学ぶ課程を共有し指導に関わることで、その前段階として学生が安心して実習に望むことができる環境調整が必要であり、これらを包括した連携・協働が求められ

る。」と報告している。

2年後の成人看護学における臨地実習に向けて、今回明確になった課題について検討し、臨地実習指導体制を整えていきたい。

## 6. 結論

- (1) 臨地実習指導者の思いは、《臨地実習指導者の指導観》《教育課程の違いによる実習指導の複雑さ》《多様な背景を持つ学生に対する学生観》《教員との連携への要望》《成人看護学実習の受け持ち決定の苦慮》などの7のカテゴリーから構成されていた。
- (2) 臨地実習指導者は、多様な背景を持つ学生への対応の難しさや教育課程の違いによる実習指導の複雑さを感じていた。より明確な指導要綱が示されていることに指導のやりやすさを実感していた。
- (3) 成人看護学実習において、〈成人実習の対象者が高齢になりがちな心配〉〈在院日数の短いことによる心配〉などがあり、成人看護学としての学びが得られにくい現状を苦慮していることが示された。
- (4) 新設の大学の実習に対して《教員との連携への要望》が示された。〈コンタクトをとりながら一緒にやりたい〉〈教員は臨床の場で学生をみてほしい〉〈カンファレンスや会議を持ちたい〉などの思いがあった。臨地実習指導者と教員との連携・協働を進めることで学生の効果的な学びに繋がるのが分かった。

## 謝辞

本研究にご協力くださった、臨地実習指導者の方、病院管理者の皆様に深く感謝いたします。

## 引用文献

- 1) 高田法子, 平岡敬子「ユニフィケーションモデルの検討—臨床と大学の連携と協働の可能性」, 『看護学統合研究』2(2), 広島文化学園大学,

2001年, pp. 1-8.

- 2) 高橋悦子, 松本千恵子, 池田光子, 本谷久美子「臨地実習指導者が実習指導をして抱く思い アンケートの自由記述の分析より」, 『第40回 日本看護学会論文集: 看護教育』, 2009年, pp. 158-160.
- 3) 尾崎幸代「文献研究から考える臨地実習指導者の抱える不安と必要な支援 —2003年から2010年の文献を対象として—」, 『看護教育研究集録』No.37, 神奈川県立保健福祉大学実践教育センター, 2012年, pp. 140-147.
- 4) 前掲書3), p. 144.
- 5) 原田恵子, 持田容子, 片山弥生, 甲斐みどり「看護系大学生の臨地実習に初めて関わった実習指導者のとまどい」, 『第42回 日本看護学会論文集 看護教育』, 2012年, pp. 72-75.
- 6) 厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書 2011」, <http://www.mhlw.go.jp/stf/houdou/2r9852000001310q-Att/2r9852000001314m.pdf>, (2015. 8. 20), p. 2.
- 7) 前掲書6), p. 3.
- 8) 中村伸枝, 竹中沙織, 仲井あや, 上林多佳子, 若菜幸子, 和住淑子, 黒田久美子, 河部房子「学生の看護実習を通じた学びの特徴と大学教員と臨床指導者の連携・協働の在り方」, 『千葉大学大学院看護学研究科紀要』第36号, 2014年, pp. 21-26.

## 参考文献

- 1) 福井美貴, 末安民生, 野末聖香「精神看護学における臨床実習指導者の抱える困難—大学教育に焦点をあてて—」, 『日本精神保健看護学会誌』14(1), 2005年, pp. 88-97.
- 2) 椎葉美千代, 齋藤ひさ子, 福澤雪子「看護学実習における実習指導者と教員の協働に影響する要因」, 『産業医科大学雑誌』32(2), 2010年, pp. 161-176.